

空間

館長 綱島 窈

Proxemics という新しい言葉がある。これは人間の空間の使い方を通文化的視野に立って研究する学問領域の呼び名だとのこと。動物にも人間にも適正な空間が必要であり、それが欠けるとさまざまな異状が現われてくるという。大学にはいった諸君には新しい空間が待っている。図書館

も学問をする空間の一つである。自宅の勉強部屋や下宿の四畳半では読めないような本が図書館でなら読めるということもある。異状が起こらぬよう、適正な知的空間として図書館の利用をぜひ工夫して欲しい。

(52・3・18)

開館時間

皆さんは、学内の図書館をどこでも利用する事ができますが、利用可能な相模原キャンパス内と、白金図書館の開館時間をお知らせします。

① 教養図書館

9時から6時まで(土曜1時まで)

② 医学図書館

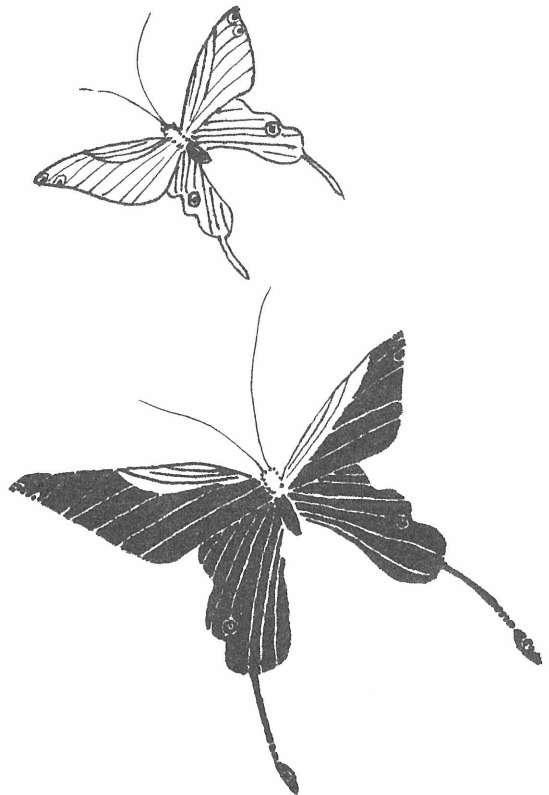
9時から7時まで(土曜5時まで)

③ 衛生図書館

9時30分から6時まで(土曜3時まで)

④ 白金図書館

9時から7時30分まで(土曜5時まで)



「私自身の読書にすぎない」

神 達 章 子 （数 学）

本を読んでいる時が一番楽なのだ、と自覚している不精な本好き人種は多いと思う。私自身、身辺に書物 一勿論仕事外の— がない生活など考えられないけれども、自分の本好きが人生にとってプラスであったとはどうも信じ難いものがあるから、読書の勧めなど、とてもできる柄ではない。推薦等となると、それこそ読書して忘れていたい。

教養部の企画に閉口のあまり、私は 20 代と 40 代後半の「自分の読書」から、できるだけ機械的に、確かに読んでいましたという書名を挙げてお茶を濁した。それでもなお、というよりそれからこそという方が本当であろうが、直後から後悔した。記憶に残る読書というものは、多かれ少なかれ読書当時の生活に結びついていて、それが特に若い時期のものであると、冗舌か、沈黙かを強えられるよううとうとしさがある。

18才で敗戦、つまり国家権力の崩壊に出遭っ

た。どのような事情の下にせよ、変革は若い心を揺さぶらずにはおかない。私にとって戦後の魅力はまことに大きく、解放感と好奇心にあふれかえった。併し、あまりに易々と変革を受け容れた報いで、やがて自己不信に陥った。20才という年齢は、過去をまだ他人のせいにする事はできても、そのような自分と自分の将来を耐え難くさせる。

やっとの思いで泥沼を這い出した頃、人文書院からサルトルの全集が出始め、よく読んだ。私のように、自分を把える事が、人より以上に不得意な性格である事を承知の上でなお、自分だけを出発点にしようと思う事で僅かな安定を得た人間にとって、サルトルの作品は鎮静剂的必需品であったように思う。挙げた一冊は代表作でも何でもないが、多分当時も今も臆病者である私は、作中の臆病者に深く愛著していたにちがいない。教師から再び学生に戻った頃の読書である。

「学 生 に 与 う」

坂 入 清 （独 語）

「…要するに青年は青年らしくあればよい、これが青年の権利であり義務である。青年らしいとは、高きものへの憧憬、価値あるものへの感激、深いものへの魅惑、魂を震わすものへの涙、これである。」

上記の言葉は、河合栄治郎著「学生に与う」に見える言葉です。この書は私が学生時代に愛読し

たものですが、現在の大学生にも何らかの参考になるのではないかと考え、私の「推薦図書」の一冊に加えました。この書の第一部は、社会における学生の地位からはじまって、著者の「理想主義体系」について説いてあり、第二部では理想主義に基づく私たちの実践（日常生活、友情、親子愛、師弟愛、学園、社会等々）について書かれていま

す。日常生活の章では、例えば「酒も煙草も口にしないほうがいい」とか「学生は質朴剛健、勤儉質素であってほしい」とか述べられています。(このような事柄は瑣末なこと・どうでもよいことかも知れませんが、私はそう思いません。)最近、渡部昇一著「知的生活の方法」を読み、氏が知的生活にあこがれている学生時代、足代や食費を惜しみ、煙草も吸わず本を買った、ということに感銘を受けました。氏が現在、能動的知的生活者としてすぐれた業績を出しておられるのは、学生時代からしっかりした心構えがあったからでしょう。

「 本 と 私 」

石 川 俊 明 （物理）

今までに自分が読んだ本はあまり多くはない。それというのも本を読んで夜を明かした経験は一度もないし、また考えただけでも眠くなってくる。しかしこんなことは自慢にならない——そう思って本を読み出したのはここ北里に来てからのことである。

読んでみたい本というのがなかったから、大学時代の英語の教科書（もちろん訳本）とか、有名な作家の代表作とか、書店で見つけた「フムフム、これは」と思う本などを読んでみた。中には全然印象がない本もあるが、やはりそれぞれの本に印象が残った。これまでに読んだ本の中で、ドストエフスキーの「罪と罰」には特に大きな感動を覚えた。クライマックスを再三読み返したものである。登場人物の性格が手にとるようにわかるし、あたかも自分がその場に居るような錯覚に陥って

私が「学生に与う」をはじめて読んだのは、学生として、いかに大学生活を送るべきかという問題を考える指針としてですが、現在、教師の端くれとしてこの書を読み返しますと、河合栄治郎氏が教育者としていかにすぐれた人物であるかがわかります。氏に対する評価はさまざまでしょうが（例えば美濃部亮吉著『苦悶するデモクラシー』によると、氏は主義と実践が必ずしも一致していないと述べている個所がある）、この書を繙くことによって私は自分の無能力を痛感し、正にそれゆえに努力・発奮しなければならないと思います。

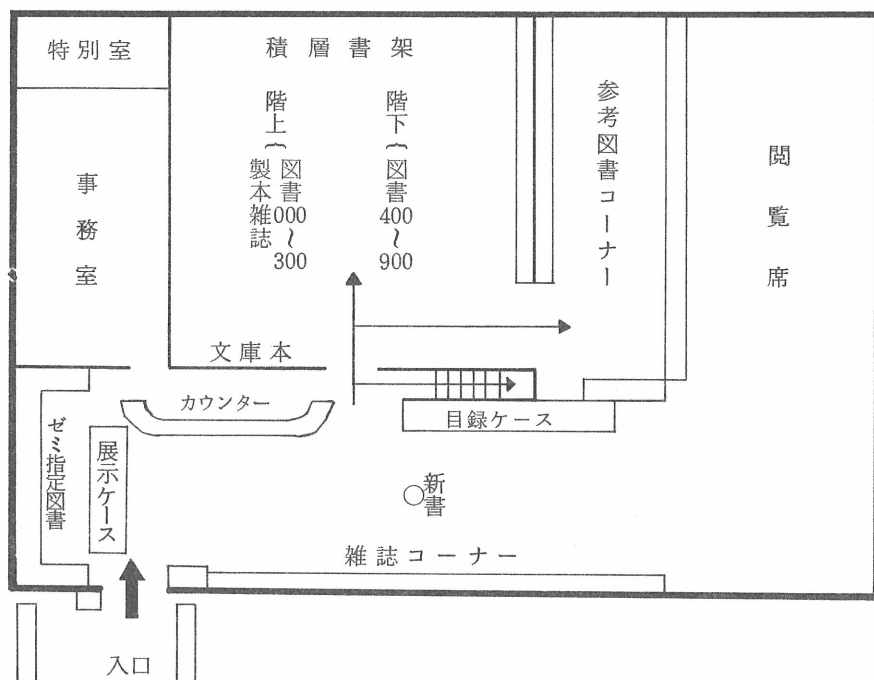
しまう。本の中に自分の現実がある、実に不思議なことである。

人が何かを体験するその仕方にもいろいろある。たとえば「読んだ本」が後の人生に影響を及ぼすとき、その人は本を読んだ以上の「体験」をしたことになる。他方、「作られた本」には作者の経験とか願望とかが含まれている。それは現実に起こり得るという迫力からわかるし、作者を研究している専門家の解説からもわかる。作者の置かれた環境や生涯などを考えたとき、本は「作られたもの」を越えて自分に迫ってくるように感じられるのである。

本を読み^{みたい}たいという人の心境があるとすれば、それは私の場合、「罪と罰」以上の感動を期待することであろう。

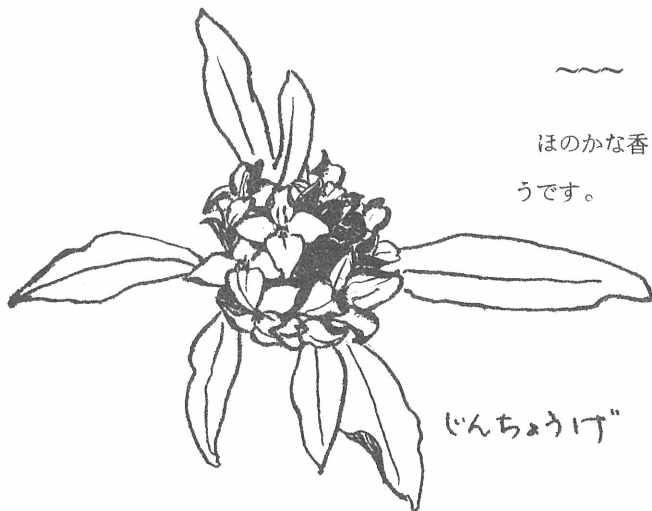
◎ { 雑誌 } コーナーの位置が移動しました { 参考図書 }

皆さんがよく利用している参考図書と雑誌が大幅に増えたため、下の図の様に館内の移動を行いましたので、お知らせいたします。



〜〜 ひ と こ と 〜

ほのかな香りにのって、春が急にやってきたようです。



じんちょうげ

はじめまして、新入生の皆さん！
相模原のキャンパスに早く馴染んで、実り多い日々を過ごして下さい。
図書館の利用方法も早く覚えて下さいね。